

2024 年度 プール学院中学校・高等学校 学校評価

1. めざす学校像

プール学院は「キリスト教の精神を根底とする霊的人格教育」を行い、この精神を将来に於いても守り、安定的かつ持続的な学校経営をめざすために、教育内容を充実させ、社会的要請にも応え得る教育活動を実践する。また、「グローバルな視野に立ち、愛と教養をもって社会に貢献できる人間」、「精神的なもの、目に見えないものに価値をおき、他者に奉仕できる人間」、「困難や逆境に負けない忍耐力をもった、問題解決のできる人間」を育成する。

2. 中間目標

- 1) キリスト教に基づく人格教育
 - キリスト教の最も大切な教えである「愛」を学び分かち合い、他者への理解と互いの尊厳を大切にする隣人愛を学ぶ。
 - 個人の多様性（民族・文化・価値観やライフスタイル等の違い）を積極的に受け入れ、他者への思いやりを涵養する。
 - 一人ひとりの個性を大切に、安心して安全な充実した教育環境のもとで豊かな人格教育を実践する。
- 2) 魅力と特色ある教育を実践する
 - シラバスを常に見直し、言語活動の充実を図り、生徒が主体的に取り組める授業を行う。
 - 授業者は授業の目的と振り返りを実施し、学力の習得を図る。
 - 授業改善を実施し、研究授業には当該教科或いは教科外の教員の参加を奨励し、教科会において授業改善の協議を定期的に行う。
 - ICTを活用した教育活動を実践し、興味・関心を喚起し、思考・判断・技能・表現力を養う。
 - アクティブ・ラーニングを積極的に採用する。特に英語教育においては、本校独自の英語コミュニケーションスキル向上プログラム（E-Act）と海外留学制度の充実を図る。
 - 生野区等の地域の課題に深く関わりつつ、グローバルな視野を持って多文化共生社会をリードする人間の育成に努める。
- 3) 学校教育力の向上と生徒・保護者の教育満足度の向上を図る
 - 教科指導、教科外指導と校務分掌の向上を図り、生徒と保護者マインドの学校経営を実践する。
 - 授業評価、いじめアンケートや学校行事後のアンケートを基に、年間のまとめを行う等校務の検証を実施し、丁寧で満足度の高い教育活動を実践する。
 - 不登校や心の問題を抱えた生徒へのきめ細やかな対応を実施する。
 - 個人情報の管理とリスクマネジメントの徹底を図る。
 - 職員の働き方改革を実施し、閉校時間の設定と勤務時間と勤務内容の把握を実施する。

【自己評価アンケートの結果と分析・学校評価委員からの意見】

自己評価アンケートの結果と分析（2024 年 2 月実施）	学校評価委員会からの意見
○ 生徒 プール学院の生徒として、規範意識も高く誇りをもって行動できている。宗教行事やボランティア活動など「愛と奉仕」の精神をさらに高めていくことが課題である。 ○ 保護者 自粛ムードもなくなり、保護者の学校行事・国際交流等への期待の高まりが感じられる結果であった。ほぼ全ての学校行事について行っている動画配信もその一助となっているものと考えられる。 ○ 教職員 全学年・全授業において iPad を活用した授業の研究が進めている。今後もその積極的な活用をさらに進めていきたい。また、働き方改革を進めるため、クラブ活動・自治会活動のあり方を考えていきたい。 ○ 分析 先生方には、生徒からの授業に関する評価と教員自己評価にある差を縮めるため更なる工夫をしていただくことと、生徒たちの「愛と奉仕」の精神を高める方策を考えてもらいたい。家庭においては、授業受講態度を含め学習に対する適切な声掛けと諸行事への積極的な参加を呼び掛けていただきたい。	【評価できる点】 - 志願者数と入学者数の状況から、中学校高等学校とも一定の評価をいただいていると思われる。 - アンケートから読み取れる生徒と保護者の規範意識と、外部・地域の方々からの登下校中のマナーの良さに関する評価が一致している。 - 校内の Wi-Fi 環境が整い、学校行事の動画配信などを含む教育活動全般に ICT の活用が十分に行われている。 - アクティブラーニングを積極的に採用し、英語の E-act では保護者の参観も増えており、理解と期待がうかがえる。 【今後の課題】 - 礼拝や宗教行事を通してのボランティア活動において、中学生の意識が低いことに対策を講じていただきたい。 - 中学生の部活動に対する参加率や満足度が低い状況について、あり方を検討いただきたい。 - 先生方には、生徒からの授業に関する評価と教員自己評価にある差を縮めるため、更なる工夫をしていただくことと、家庭においては、授業受講態度を含め学習に対する適切な声掛けをしていただきたい。 - スクールカウンセラーの取り組み、相談内容は守られることについて、生徒・保護者双方に広く周知し利活用を促していただきたい。

3. 本年度取組内容及び自己評価

中間的 目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
キ リ ス ト 教 に 基 づ く 人 格 教 育	(1) ア 建学の精神に基づく人格教育 キリスト教の教えを基に愛と隣人愛を学ぶ	①毎朝の礼拝を行う。 ②宗教行事を大切にし、生徒主体の行事とする。 ③研修などにより人権意識を醸成する。 ④社会性、マナーをしっかり身につける。	①毎朝の礼拝での聖歌の賛美と聖書のみ言葉を受け入れることから、キリスト教の基本的な精神を学びとり、実践に移すことを心掛ける。生徒のアンケートから「礼拝が大切な時間だと思うと感じている」は中学 81.0%、高校 74.8%である。 ②宗教行事を通して、ボランティア活動を中高共に中学 63.1.0%、高校 81.3%の生徒が身近に感じるようになっている。 ③人権意識に関しては人権講座等の実施から生徒・保護者の 80%以上が人権を尊重する意識を育てようとしていると評価している。 ④校則を守って学校生活を送ることについて中学生・高校生・保護者の約 95%があてはまると答えており、規範意識は高いと考える。	①中学生の評価が全体的に改善したことは喜ばしい。逆に、高校生の評価が低下しており、中高の評価が逆転居ている。保護者アンケートでは中高とも 90%近く評価されており親子の受け止め方の差異が気になる。 ②教員のアンケートにおいては、朝の礼拝と終礼指導により、学院全体が愛と奉仕の精神や隣人愛を学ぶ態勢となっていると理解されている。
	イ 多様性の理解	①多様性の認知を行う。 ②隣人愛を醸成する。	①総合的な探求の時間、GlocalStudy 等の教科横断的な学びの機会を設定し、民族・文化・価値観やライフスタイル等の違いを理解する教育を実践し、生徒の 9 割近い満足度を得ている。 ②海外修学旅行や海外プログラムが順調に実施できていた。また、校内でできる E-Act 等による国際教育も積極的に推進し、生徒と保護者から高い評価を得ている。	キリスト教の精神を常に心に受けとめ、異文化に接する機会等を通して、世界のさまざまな人々の生活、考え方や価値観を理解することで人類愛を育んでいる。
	ウ 豊かな人格教育	①キリスト教教育を礎に、愛と奉仕の心をつなぎ、人と社会をつなぎながら生徒の未来を創る一人ひとりを大切にする豊かな教育環境を創出する。	①学校は楽しいといった質問内容に対し、中学生は 74.7%、高校生は 82.2%の生徒があてはまるとし、保護者は中学 78.7%、高校 88.7%があてはまると見ている。 ②創立 145 年に及ぶキリスト教主義の学校として大阪府をはじめとした近隣県への認知度も高く、大きな期待を付託されている。	コロナ禍の制限がなくなり、再開を待ち望んでいた生徒も多かった為か、高校生でボランティア等の活動に積極的に参加する生徒が多数いた。生徒の意識が高いことが改めて確認できた。ただ、中学生ではその機会が少ないせいかな昨年度よりは 4.1%改善したが、依然 63.1%と低い評価に留まり、早急な対策が望まれる。
	(2) ア グローカル教育 文部科学省指定の多文化共生グローバル型の取り組み	①文部科学省指定「地域との協働による高等学校教育推進事業（グローバル型）」のアソシエイト校として採択を受け、地域協働学習 GlocalStudy を開講している。 ②教科横断型の探求学習や姉妹校、協定校との交流を実施する。	①高等学校の学校設定科目「GlocalStudy」がカリキュラム変更に伴い、S 特進・一貫特進コースでも履修が可能となった。高Ⅰでは 60 名程度が受講しており、年々その数が増している。多くの生徒が多文化共生をめざす大阪市生野区の課題について探求的に学習し、グローバルな課題に出会うきっかけとなり、地域を知り、さらに外国語を学習する意欲を高めることができた。 ②生野区役所、聖公会生野センター、いくのパークとコンソーシアムを構築し、大阪市生野区から発信する多文化共生社会の実現をめざすカリキュラムを編成した。 ③本年度、姉妹校である「崇徳女子高等学校」との交流が 20 周年を迎え、新たな関係を確認すべく調印式を主なった。タイの SWK 校との相互交流も実施し、今年は引率教員 20 名との交流も行うことができた。	多文化共生の認識、生野区における「共生」の実態を理解し、私たちができることを考えるカリキュラムを終えることができた。生野区役所、聖公会生野センター、いくのパーク、生野本通り中央商店街、リゲッタ等に協力を依頼し、ワークショップ等を開きながら、生徒たちの多文化共生の興味関心を喚起し、教科横断的な探求活動を引き続き行っていく。
魅 力 と 特 色 あ る 教 育 を 実 践 す る	(1) ア 特色ある教育活動の実践 シラバスの改編	①年度ごとに学習内容を精査しシラバスを改編している。昨年度から、観点別評価についても記載するようにした。 ②年度初めにシラバスを生徒に説明し、授業のねらいや（到達目標）、学習方法や評価方法を明示することにより、学習への意欲喚起と自学自習の習慣をつける。	①生徒の授業評価において中学・高等学校で肯定的意見は次の通りである。国語（中学 78.1%、高校 83.8%）、数学（中学 83.8%、高校 74.8%）、社会（中学 75.5%、高校 72.8%）、理科（中学 77.9%、高校 70.4%）、英語（中学 83.5%、高校 77.8%） 中学生の評価が昨年度に比べて、すべての科目で向上している。 社会では高Ⅰで 20%以上低下しており、理科では高Ⅱで 16%の低下がみられた。 ただ、すべての科目において 70%以上は評価を得られている。 ②保護者の授業アンケート（授業内容が理解できる）においても中学 75.7%、高校 76.1%と昨年度より向上している。	教員の自己評価項目「教科内容に興味を持てるよう配慮した授業を行っている」98%や「生徒は授業を集中して聞いている」96%と高く授業に対して意識高く取り組んでいることがわかる。 ただ、生徒の評価は 70～80%程度と教員の評価に比べ、大きく乖離していることに留意する必要がある。
	イ 授業改善	①教科内で授業の相互観察を行い、適宜アドバイスをを行う。	①新規採用の常勤講師の授業観察を終え、アドバイスを校長が行った。 ②教科会で授業改善の取り組みについて検討を行った。	①年間の授業計画を説明し、計画通りに行っているとの評価は教員の 93%を超えている。 ②小テスト週末課題の検討や期末考査の複数教員による検証を毎考査ごとに行い、試験問題や採点ミスを防止している。
	ウ ICT の活用	①校内 Wi-Fi の設置工事を行った。 ②ほぼすべての学校行事でオンライン配信を行った。 ③全学年で iPad の活用を推進した。	①校内の IT インフラを活用した充実した教育活動を行うことができた。 ②教科、学年の特徴や特色を生かした授業、総合的な学習の時間、ロングホームルームや学校行事等に ICT 教育が十分生かされている。 ③今年度から保護者アンケートに「ICT の活用が十分に行われている」を加えたが中学 82.2%、高校 89.4%の評価を得た。	学年・分掌で ICT 係を定め、様々な分野で活用できるように対応した。教育活動全般にわたって ICT 化が促進されている。 また、今年度より保護者向けの Classi が使えるようになり、緊急連絡や欠席連絡などの手段として活用できている。
	エ 英語教育のアクティブ・ラーニング「E-Act」等の実践	①英語ネイティブの外部人材を活用し、英語に親しみ、英語を通したコミュニケーションの充実を図る。 ②英語ネイティブ教員 2 名の雇用を継続する。	①英語に親しみ、英語の発話によるコミュニケーションを図ることができた。 ②保護者は英語を活用した国際理解教育に関心が高く、学校の教育方針が良く理解されている。	英語の E-Act への保護者参観が増えていることは、教育活動への理解と期待感の表れと理解できる。

学校教育力の向上と生徒・保護者の教育満足度の向上を図る	(1) ア	全てのステークホルダーの満足度向上 教職員の資質の向上	①校内研修の実施や校外のオンライン研修への参加を奨励した。	①AED 講習会を定期的に行い、緊急事態への備えをした。 ②立教大学総長の西原先生より「聖公会が大切にしてきたものと聖公会学校の建学の精神」についての講演を聴いた。 ③甲南中高校長の山内先生をお呼びし「これからの私学の在り方」についての研修を行った。 ④香蘭女学校校長の鈴木先生より「これからの時代の女子校の意義について」の講演を聴いた。	①校内外の研修に参加するなど資質向上に取り組む努力をしているとの評価が昨年度より10%以上向上したが、依然 67.0%と低い値に留まった。教職員のニーズを考え、様々な研修を設定していきたい。 ②資質の向上を学校の教育力につなげ、プール学院の満足度向上に結びつけたい。
	イ	校務の見える化	①年度初めに教職員(希望者)と校長が面談を実施し、前年度の振り返りと新年度の校務内容と進捗計画の確認を行う。 ②校務遂行に当たっては5 W1H を明確にし、学年、校務分掌などのチームや組織を活かした協働姿勢を積極的に推進する。 ③出退勤の電子管理を促進し、在校時間の長時間の教職員には教頭が適宜声かけを実施する。 ④学校ホームページに教育活動についての情報提供を行い、頻繁に更新する。	①教職員との面談から、学校の課題や教職員の悩みなどを学院経営層が把握できる仕組みを構築した。 ②出退勤の電子化を進め、各個人が自分の労働時間を把握することができた。 ③HP のリニューアルが終了した。今後不具合の修正を進めつつ、新たな活用方法を模索する。	教員の自己評価から「生徒からの信頼が得られるよう努力している」及び「保護者から信頼が得られるよう努力している」項目には95%以上が当てはまると評価し、校務遂行における正確で迅速な処理だけでなく、生徒と保護者視点を理解された職場環境の醸成がされている。
	ウ	校務の年間のまとめ等の促進による課題の発見と改善策の実践	年間のまとめ等を教職員の理解のもとに行い、問題意識を常に持ち、改題への対策は部会、係会、教科会等で複数の教員の経験と知恵を基に行う。	①学年や分掌を横断した「一貫・S 特コース会議」や「キリ教コース会議」に加え、「国際コース会議」を開き、立場や経験年数にとらわれない意見交換を行うことができた。 ②「総合芸術」コースについてもカリキュラム等の検証を行う。	一貫・S 特, キリ教、国際コースの課題共有・検討が活発に行えた。 総合芸術についても今後、課題検討を行って行きたい。
	エ	不登校生徒や心の問題を抱えた生徒対応	①担任、学年主任、管理職、養護教諭による支援委員会やサポート委員会を頻繁に行う。 ②スクールカウンセラーの情報を当該教員内で共有する。 ③スクールカウンセラーを講師とした研修会を年1回は実施する。 ④登校困難な生徒に向けて就学を支援する制度を制定し周知をする。	①学年会と生徒指導部会の情報共有を頻繁に行い、必要に応じてスクールカウンセラーにも参加を要請した。 ②行政機関との頻繁な情報共有を行い、適切なアドバイスを受けることができた。 ③いじめアンケートを実施した。 ④不登校生徒に対する新制度の概要を策定した。	学校関係の悩みから転出する生徒が一定数存在する。不登校生徒に対する新制度の周知を進めていきたい。
	(2) ア	働き方改革 校務内容の自己把握	①出退勤時間の自己把握に基づき、校務内容を自己把握し、学年、グループによる協働態勢を徹底する。 ②情報の共有化と知識と経験の伝承を行う。 ③後進の育成を行う。	出退勤の電子化により、勤務形態を把握することができた。それにより、今後の業務上の解決すべき課題も発見することができた。	「プール学院の教員である誇りをもっている」のアンケート調査の93%をさらに向上させ、創立150周年に向け職場環境の整備と労働満足度を高めるためのワークショップや研修会を実施する予定である。
	イ	出退勤の電子管理	①教職員の勤務実態の自己把握をするために、出退勤の情報を電子化した。 ②教職員の最終退勤時間を昨年度より 30 分早めて 20 時 00 分にした。	①出退勤状況を把握できるようになり、業務の効率化を進めるきっかけとなった。また管理職にとっては、業務の分散化を進める手立となった。 ②カリキュラムの改訂により、昨年度より生徒の最終下校時間を 30 分早めた。それに伴い、本年度からは、教員の退勤時間も 30 分早めた。	長時間労働、属人的校務執行や従来の働き方への考え方を改善し、働きがいのある職場環境にするために管理職との意思疎通しやすい職場環境の醸成はできつつある。引き続き、労働満足度を高め、より良い教育活動ができる職場環境となる施策を講じる予定である。